

書物の「帰属」を変える（Ⅳ）

——安部公房『箱男』から提示される新たな三つの問い——

永野 宏 志

『箱男』（一九七三・三書き下ろし 新潮社刊）の検討を開始する際、指示の問題から出発した拙論の最初の稿では、言葉が内包的に意味を指示しない『箱男』の特徴を、外延的だがそれ自身をも指示する例示と捉えた。^①この観点からすれば、『箱男』は「ノート」と書物のズレを読者に示唆しつつ、作者と読者を定点化した読みの有効性を媒介すべき書物自身が問い、指示関係から見た曖昧さが物語、虚構、世界の移動性によって起こり、文を前提とし直接指示を基準とした読みの習慣の変更を促す点に『箱男』の特徴を見出せた。そして、この問いから生まれる次元を、『箱男』の折込付録「〈書齋にたずねて〉」での「都市的なもの」の「自由な」「展開可能性」として捉えることが可能になった。

この「展開可能性」を作者の言葉に留まらせず、『箱男』全体に採用された「ノート」という虚構設定から愚直に読む必要があったのは、この付録がインタビュー形式によって作者の直接の声が編集され、間接的だからではない。誰もが書き込める「ノート」を読者

だけが書き込めず、さらに誰が書き込んだのかを書物の印刷文字から判断できないという点で、読者は作者ではなく書物に戻るからである。この時、多数の記述者による断片的記述という「ノート」に一つの世界と一つの物語を対応させようとしてきた読者は、書物上を放浪する一方、「ノート」に挿入された八枚の写真のように挿入された折込付録を読むことになる。そうすることで、作者も作品を統御する役割から解放され、書物のページに任意に差し挟まれる「展開可能性」を獲得するのである。

だが、この見解に至る前に、新たに三つの問いを立てる必要があるように思われる。以下の三つの問いは、間接性、部分性、放浪性という特異な関係を提示し、読者の「帰属」する習慣自身の本質的な変形を促すからである。まず「ノート」の多くを占める記述者としての〈ぼく〉をなぜ常と同じ人物と同定するのかという人称の扱いに関わる物語と世界の対応関係の再考を促す問いがある。次に、『箱男』とその外にある二つの「予告」と『箱男』の中にあって章

題のない詩的断片を「ノート」という設定から捉える際の作品の範囲に関わる物語と虚構の対応に関する問いがある。さらに、『箱男』において「都市的なもの」と関係づけられる「自由な」展開可能性を、『箱男』の側から捉える際の虚構と読者の実世界の対応に関する問いがある。これらの問いは本論が用いてきた解釈に関する習慣をも対象にするだろう。

前稿では、『箱男』の最後の場面での物語に対する虚構の移動性を検討したが、この場面がさらに物語と世界の新たな関係に踏み入っている場面までは言及しなかった。本論では、再びこの場面から物語と世界の関係の移動性を検討した上で、第一の問いへと移行したい。というのも、物語、虚構、世界の関係を構造として仮設した拙論（「書物の「帰属」を変える（序）」、以下「（序）」と略^③）において、習慣的な読みが「帰属」する三者の一对一对応関係に対して提示した作品として見た諷諭構造の「照応」関係にも、さらに「自由な」展開可能性^④が行使されるべきだからである。言い換えれば、「（序）」における物語、虚構、世界という作品を中心とした三つの問いは、『箱男』における「ノート」という虚構設定から離脱した移動性それ自体に関する新たな三つの問いに沿って、この「展開可能性」の新たな位相を創出する必要があるのである。

一人称代名詞としての〈ぼく〉

―間接性に関わる第一の問い―

作品としての『箱男』の最後は、次のように閉じられる。

現に姿を消した彼女だって、この迷路の何処かにひそんでいることだけは確かなのだ。べつに逃げ去ったわけではなく、ぼくの居場所を見つけ出せずにいるだけのことだろう。いまならばつきりと、確信をもって言うことが出来る。ぼくは少しも後悔なんかしていない。手掛りが多ければ、真相もその手掛りの数だけ存在していいわけだ。

救急車のサイレンが聞こえてきた。

《……………》

「ノート」が「落書」となり「余白」となる過程では、まだ物語と虚構対応関係を解体する範囲に留まっていた移動的性質が、虚構を離れて「迷路」としての世界に及ぶ場面である。このとき読者は物語と世界を固定する自らの実際世界の投射が通用しない場面に立ち会うゆえに、物語と虚構の関係から物語と世界の関係に移動性自身がシフトする展開に困惑を隠せない。

その一方で、最後の一文の配置は、それまでの「ノート」から「迷路」への急激な移動による物語と世界の急速な転換を終息させ、『ノート』の虚構設定に戻し、〈ぼく〉を主な記述者とした複数の記述者が属する世界と物語が再び対応関係を結ぶかのように読者を促

してもいる。だがその際、この一文の主語が誰かという疑問が浮かぶとしたら、この文と「手がかりが多ければ、真相そのものもその手掛り数だけ存在していいわけだ。」という文の間に一行ぶんの余白があるからではないだろうか。物語と世界の対応が「ノート」という前提において成立していた点に注意を向ければ、この文の記述者が〈ぼく〉であるのと同様、他の記述者にも開かれている点に考慮する必要があるのである。物語と世界の急激な移動の直後ゆえに、一致していると思われた物語と世界の関係が、不確定で一時的なものとして読者の念頭に記憶されても不思議はない。とすれば、この一文の前に広がるわずかな空白は、「ノート」という設定に戻ったゆえに複数の記述者の可能性を受け入れる余地を読者に与える役割を果たすともいえる。誰がこの「救急車のサイレン」を聞いたのか、あるいは、登場人物以外の誰かが書き込む可能性はないのかという疑問が、「ノート」の「自由な」書き込み「可能性」を物語と世界に一致させようとするほど際立つからだ。

この可能性を保持するなら、物語と世界が一致していても「ノート」の「字体」やペンの種類や色を読者自身の目で確認できず、加筆もできないというこの作品での読者の立場上、記述者の特定は曖昧なままとなる。〈ぼく〉と「ノート」に書かれていても、過去にこの言葉を使用した同じ人物が書いたという判断が、その記述内容から推測可能である場合も、〈ぼく〉という代名詞を記述者とした諸断片に各々別の記述者が存在する可能性は排除できないからだ。

『箱男』の多くの部分の記述者を担う〈ぼく〉は、物語と世界の対応関係を維持するために必須の役割を果たしている。が、物語世界における〈ぼく〉は「ノート」設定においては文字としての「〈ぼく〉」という文法的な機能面での一人称代名詞でもある。「ノート」設定が強調するのは、〈ぼく〉という文字を使用する権限が特定の人物に制限されず、他の人物が最初の〈ぼく〉を使用した記述を引き継ぎ、その物語世界における〈ぼく〉として書く可能性である。

代名詞の性質をめぐる問題に対し、エミール・バンヴェニストは人称代名詞を取り上げながら、「わたし／あなたの人称的相関関係」⁽⁵⁾がその前提であるとした。この関係においては、代名詞は「単一の類を構成するものではなく」「ことば」の「様相に応じて、相異なるいくつかの種をなすもの」として定義され、「話の現存 (instances de discours)」または「離散的かつ、つねに一回限りであって、それによって話し手が当該言語を言として現動化する行為の特性を示す」ものと考えられる。以下は、バンヴェニストが名詞と比較しつつ一人称代名詞「わたし」の区別を明確化する箇所である。

一つの名詞の使用のそれぞれの場合、潜在的なままでもどまあるかあるいはある特定の対象において現動化されるかすることができ、しかもそれが呼びおこす表象においてつねに同一であり、恒常的かつ《客観的》なある観念を指向する。しかしわたしの使用は、どの実例も指向の一つの類を構成しはしない。なぜならば、わたしとして定義することができ、それにこれらの用例を一定して送り返してよいような《対象》は存在しないからである。おの

おののわたしはそれぞれに固有の指向をもち、そのつどわたしとして設定されるただひとりの存在者に対応するのである。

(E・バンヴェニスト「V 言語における人間 16 代名詞の性質」『一般言語学の諸問題』所収)

バンヴェニストが人称の中に三人称を含めないのは、三人称が「話^わの現存 (instances de discours)」において存在せず、「誰かに語られる (客観的)」という理由からである (二人称の「あなた」も時に「人」を表すことがあり、半ば「非人称的」とされる)。「相關」的で「一回限り」の「わたし」が重視されるのは、「わたし」と言うことが、その「現存」という行為の遂行を前提し、「わたし」の意味する存在に先行するからである。バンヴェニストは、文ではなく発話行為の中に人称代名詞を置き、発話されたテキストにおいてもそれを発話の条件として保持した。ここから、一人称代名詞の遂行的性質が「恒常的かつ『客観的』な観念を指向する」名詞と区別され、「離散的かつ、一回限り」という性質において物語テキストに関する一人称の語りとして把握可能となる。

すると、物語で用いられる言表の主体に対する物語を語る言表行為の主体の先行性という一見自然な関係は揺らぎ、逆に言表行為の主体の「離散的かつ、一回限り」の性質によって、物語世界自体の持続を人称代名詞が保証しないことが導出される。もちろん、一人称の語り手が一人で語り続ける物語世界の場合この点は目立たない。だが、多数の一人称的語りが断続的に並列するケースでは、「話の現存」の持続を、個々の記述の外に拡大させ、物語内の言表の主

体と同一視することは、一つの可能性でしかないと考えざるをえなくなる。

物語内の言表の主体と記述する言表行為の主体としての〈ぼく〉の一致に対する疑いを導出することが、「ノート」の特徴だった点を思い起こせば、最後の「救急車のサイレンが聞こえてきた」という文は、物語と世界の対応を回復させ、言表の主体である〈ぼく〉の存在する世界が、虚構の移動性を行使する以前と同一の世界のようにならねばならないと同時に、虚構内に設定された「ノート」に書かれ、そのすぐ手前の空白を跨ぐことによって、この文の言表行為の主体である記述者が、依然として物語内の言表の主体〈ぼく〉である確証はないという点も示唆するといえる。それゆえ、「話^わの現存 (instances de discours)」においてしか存在しないという人称代名詞の性質が、『箱男』の〈ぼく〉は「ノート」の「自由な」書き込み可能性に適用できるように思われるのだ。

「ノート」における一人称を「話の現存 (instances de discours)」において検討するために、やや迂回的に、安部自身人称について苦労した作品と述べた『箱男』の次の小説作品『密会』(一九七七・一二 書き下ろし 新潮社刊)を取り上げたい。⁶⁾ この作品も「ノート」形式が採用され、全編三冊の「ノート」という虚構設定の構成全体を一人の記述者が占有し、最初の二冊を自分のことを三人称で、最後の一冊を一人称で記述するという区別を作中の記述者が読者に情報を与えながら進行する。その中で、最初の二冊の「ノート」にもすでに、記述者の自覚なしに三人称が一人称に転換する場面が

設けられ、「ノート」では言表行為の主体が三人称であっても一人称が内在していることを示唆する場面がある。

強がりだけではないことはいつときぼくがヌード・モデルをしていた事実から判断してもらえはすである。最初の誘いが、スポーツ医学の雑誌用というので、つい乗せられてしまったが、ホモ雑誌が売り込み先だとわかったので、すぐ断った。それが機縁で、今のスポーツ店にも就職できたのだから、文句も言えないが、自慢できる話だと思っているわけでもない。ただそのカメラマンの言い分によると、ホモ雑誌のモデルに対する注文もけっこう厳しいらしいのだ。むやみに凶暴なのも困るが、脆弱なのもつとけない。適度に身軽で機敏な攻撃性が、絶対に欠かせない条件なのだそうである。

脱線しすぎたかもしれない。おまけに、うっかり一人称を使っってしまった。しかし平静さを保つには、手に余る瞬間だったことも考慮に入れてほしいと思うのだ。

(「ノート」I 『密会』一九七七・一二 新潮社 書き下ろし 所収)

「馬」と呼ばれる男の「注文」に従って自分を三人称で書き続けると「ノート」冒頭で宣言した記述者が、初めて一人称に逸脱し、三人称の中に「一回的」な「話の現存」を出現させる場面である。同時にこの場面は、「ノート」が「馬」への報告から二人称としての読者との「相関」関係に転換する瞬間も露呈させる。この露呈は、言表の主体と言表行為の主体を区別してきた「ノート」に、両者の

区別を曖昧化させ、二人称化された読者との「一回的」時空を出現させているのだ。

言表の主体と言表行為の主体の区別は、言語が対象や意味と直接的な対応関係を結ぶという前提から導出される。言い換えれば、両者のズレが問題になる場合も、あることを見た人がそれを見ていない人に伝達するという前提の上で言語使用が設定されているということだ。だが、言語はそれを見ていない人が別の見ていない人に伝えることができるなければ成り立たないのも確かだろう。バンヴェニストが、見ていない人が別の見ていない人に伝える間接性によって言語が可能となる点を強調する際に、三人称という客観性を人称から除き、一人称が呼びかけることによって二人称を自ら区別する「離散的」関係に注目したのは、ある出来事を見た人がそれを見ていない人に伝達することと、見ていない人が今度は別の見ていない人に伝えることの本質的な間接性を含むものとして言語を捉えているからである。

このような場面を複数個所用意し、最後に一人称の「ノート」が配置される『密会』が、「ノート」における人称の「離散」性と読者との「相関」関係を強調したと解釈可能なら、複数の記述者による記述相互の断片化によって物語の言表の主体とそれを記述する言表行為の主体の一致を揺るがす『箱男』の「ノート」の各断片にも、同じ「離散的」時空が出現しているように思われる。『箱男』のその当初から〈ぼく〉が読者へ呼びかけることで、「相関」関係が強調され、その呼びかけや問いに読者が応答できない仕掛けによつ

て、目前の書物の文字に引き戻される事態がたびたび起こっていた。それゆえ、読者が「ノート」の一人称的時空の範囲を物語世界と同一と解釈することは、逆に言語の間接性のほうを際立たせることを助長するように見えるのである。

ここで、もう一度『箱男』の最後の記述に戻るなら、その冒頭から「いまのところ、箱男はこのぼく自身ということである」（『ぼくの場合』、「ぼくはいま箱男である。」）（《安全装置を とりあえず》と一回的な「相関」性を明記している点が思い起こされる。そうであれば、最後の章で〈ぼく〉の「確信」する「手掛りが多ければ、真相もその手掛りの数だけ存在しているいいわけだ」という言葉の一行ぶんの空白の後に「サイレンの音」を書かれていても、それは同じ〈ぼく〉が書いたものかどうかはわからず、多くの「手掛り」の一つでしかないとしたら、一人称代名詞の「相関」性にあり、「ノート」の空白の存在によってその「一回」性が前景化するからである。一方それが、虚構設定上での「ノート」の「余白」であれ、箱の中の「落書」であれ、その記述が読者の読む書物のページでないのである。そこには書物と物語・虚構・世界との余白を埋めようとする読む習慣をはねつける間接性をその本質とする言葉の余白が広がっていることも忘れてはならないだろう。

二 「ノート」の領分——部分性に関わる第二の問い——

『箱男』での言葉の間接性は、最後の虚構の移動性が加速する場

面以前に、すでに「ノート」と書物のページの間において読者に仄めかされ続けていた。書物のページにおいてそれを認めるなら、最後の場面は、印刷文字が整列する行が途切れる空白を、記述者の占有する領分の境界として区別する読者の習慣的な読みを揺さぶるものと考えられる。一方、この揺さぶりは、それをまだ可能性に留まると見なし、作者や編集者というメタレベルを設定して、記述者の領分を章立てに従って区別する可能性を否定しないだろう。しかし、そのような超越的な操作を行使しても、『箱男』にはこの領分を問う別の困難が組み込まれている。最初の困難と思われる箇所は、終盤の《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》と最後の《……………》の章の間に差し挟まれた二十三行にわたる詩的断章の存在である。以下その全文を引用する。

時計の文字盤は片減りする

一番すり減っているのが

8の字のあたり

かならず一日に二度

ざらついた眼で見つめられるので

風化してしまうのだ

その反対側が

2の字のあたり

夜は閉じた眼が

無停車で通過してくれるので

減り方も半分ですむ

もし まんべんなく風化した

平らな時計を持っている者がいたら

それはスタートしそこなった

一周おくれの彼

だからいつも世界は

一周進みすぎている

彼が見ているつもりになっているのは

まだ始まってもない世界

幻の時

針は文字盤に垂直に立ち

開幕のベルも聞かずに

劇は終わった

初版から全集版に至るまで、この箇所の扱いは前後の章と独立に次のページから始まるように区切られているか、広めの余白が設けられているが、章立てに扱うべき区切りがあるにもかかわらず章題は付されていない。内容からすれば、劇の時間的な比喩を用いた前章《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》の「劇」風の設定と「しかし、何度やりなおしてみたところで、いずれまたこの同じ場所、同じ時間が繰り返されるだけのことだろう」という終わりの言葉を引き継ぐようなアナログ時計の文字盤に時間を譬えている点から、同じ人物が記述者である可能性は高いように見える。しかし、書物を通してでしか「ノート」を読むことができない読者には、こ

の見解も可能性に留まる。読者に対するこのような制限は、例えば、《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》が書かれた後、別の記述者がそれを読んで書いたかもしれない、あるいはこの詩的断片が最初に書かれ、前に空いた空白部分に《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》のほうが書かれたのではないかという別の可能性も排除できないのだ。確率的空間としての「ノート」は、言語の本質的な間接性によって構成されており、この観点からすれば、対象や意味に言語を直接的に関係させる超越的な権力の行使によっても確定できない箇所が存在するのである。

だが、作品内で移動性を「ノート」に限定するだけでは、超越的な観点への「ノート」の確率的空間の固定は強力であり、「箱男」というタイトルは誰が名づけたのかと問われれば、作品の外の作者という設定に答えを求めることが妥当なのも確かである。この答えなら『箱男』という作品だけでなく、作者の署名のあるものなら何であれ有効とされる法と習慣の強力な解決に委ねられるだろう。だがそのような取り決めの中にあつてさえ、その世界を不確定にする力が『箱男』にあるなら、作品を構成する物語と虚構の対応関係に異議を差し挟む「ノート」の移動的性質に注目することによってである。これまで述べてきたように、この虚構設定は、その移動性において物語と虚構だけでなく物語と世界の対応もずらしていく力となりえた。ここからさらに、その力が『箱男』と題される書物の中だけでなく、その外にも広がる場面も想定可能ならば、件の超越的な解決の本質にも踏み込むことができるように思われる。

ただし、注意すべきは、安部公房が頻繁に自作を異なる諸メディアにおいて改作し、ヴァージョン化する作家であるという事実からその超越性によって作者の作品のヴァージョン化として、この移動性を扱うことではない。検討すべきは、そのようなヴァージョンがひとまず「ノート」という虚構設定をめぐる場合であり、この場面の検討を踏まえてヴァージョン化を超越性なしに、作者も含めて考えるようなジャンルとメディアの場面を想定可能とする手続きが要請されるのである。それゆえ例えば、『箱男』前半の配置された《それから何度かぼくは居眠りをした》の章は、後に「周辺飛行」に演劇のためのシナリオ「鰐魚」として独立しているが、「ノート」という虚構設定が問題とならないゆえに本章の検討からひとまず外したい（本論では取り上げられないが、「ノート」における虚構の移動性とヴァージョン化の關係は重要な問題であり、「ノート」設定を除いた上でのさらなるヴァージョン概念に関する検討が必要となるだろう⁽⁸⁾）。

このような留保をした上で、『箱男』以外で『箱男』に関する「ノート」設定のテキストが二編あることに注目したい。まず「箱男 予告編—周辺飛行13」（一九七二・十一「波」所収 新潮社）では、『箱男』と同様の「ノート」を思わせる設定が採用され、『箱男』にはほとんど触れられない「B」という男についての断片がある。次に「箱男 予告編 そのⅡ—周辺飛行14」（一九七三・一（同前））では、これが「記録」であるという冒頭の添え書きに加え、書誌的には四十一か所の異同はあるといえるが、『箱男』の《箱の

製法》とほぼ同じ内容の断片がある。二つの断片に見られる虚構の移動性と次のそれに見られるヴァージョン化の關係から見ても、物語、虚構、世界の移動において、何が現実とみなされるのかという問いを開く対を成すという点では重要に思われる。だが一方で、両者は同列に扱えず、移動性という性質を「ノート」という虚構設定をどこまで物質的に扱うのが問題になる可能性が出てくる（この点で本論もまだ實際世界のノートを投射しているといえる）。例えば、「架空のノート形式」を検討した工藤智哉は、「箱男 予告編そのⅡ」を、『箱男』における「パラドックス」の一例として扱うが、「ノート」からこの扱いを考えると、ほぼ同じ内容の断片が同じ「ノート」に存在するのか、別のヴァージョンの「ノート」の存在を想定すべきかという、物質性を帯びた「ノート」の設定自体に疑問が向けられるだろう⁽⁹⁾。本章では手続き上、まだ物質性を帯びる「ノート」設定を保持し、「箱男 予告編—周辺飛行13」の検討から入りたい。

この断片では語り手Ⅱ記述者が自分と同じように記録していた「箱男B」の「ノート」の書き出しを筆写する場面から始まり、路上で「箱男C」を見かけ、路上生活者となり、ある暴力沙汰に巻き込まれる過程が描かれる。この語り手は冒頭では「ノート」に書いていると述べていない。しかし、「箱男のご多分にもれず、彼もノートを一冊用意していて、その書き出しはこんなふうに始まっていた」という導入部を読むとき、読者は「彼も」という言葉から二つの可能性の中に立たされる。もし語り手が「箱男」の一人である場合、

この記述は「ノート」に書かれており、もし単に「B」の「ノート」を読む語り手である場合、別の「箱男」の「ノート」も読んでいる可能性を示唆すると解釈できるからだ。しかし、後者の場合、この言葉の虚構設定は物語の語り手の独白か虚構の「ノート」の記述かという判別が難しくなる。『箱男』以前に書かれたこの一編を初読する場合、独白として読む可能性は『箱男』読後に読むよりも高いが、『箱男』読後でもその可能性は排除できない。しかし、『箱男』の虚構設定で「ノート」の余白に注記が書かれているように、この断片にも次のような記述によってその曖昧さを破るだろう一つの道を与えられている。遠回しにだが、語り手は自ら書いていると記しているのである。

（だが、それからの数秒前に展開された、Bと襲撃者の争いについての詳細は、あえて書かずにおくことにする。なにぶん、まったく人気のない場所で行われたことだし、当事者以外には分るはずもない。何かが行われ、何かが行われなかった。そして約十八秒が経過する。）

（「箱男 予告編—周辺飛行13」）
ここから、語り手もまた「ノート」に書いているなら「箱男」と推測することはできる。だがこのテキストのどこにも、語り手が書いている素材に関する情報はないという点に注目しなくてはならない。この曖昧さに、『箱男』の虚構の「ノート」設定がどのようにして知らされたかを思い起こすと、『箱男』冒頭にもこの曖昧さから始まっていた点に注意を向けなくてはならないからだ。『箱男』冒頭には「ノート」ではなく、単に「記録」とある。

これは箱男についての記録である。

ほくは今、この記録を箱のなかで書きはじめている。頭からかぶると、すっぱり、ちょうど腰の辺まで届くダンボールの箱の中だ。

つまり、今のところ、箱男はこのほく自身ということである。箱男が、箱の中で、箱男の記録をつけているというわけだ。

（《ほくの場合》『箱男』所収）

冒頭では「記録」の曖昧さを携えたまま《箱の製法》、《たとえばAの場合》を経て、《安全装置をとりあえず》の章冒頭でようやく「ノート」という言葉が出てくるとき、読者は《ほく》という語り手＝記述者が彼の「ノート」に書くという「安全装置」を与えられたのだった（「ところで、繰り返すようだが、ほくはいま箱男である。そこでしばらく、ほく自身のことを書いてみようと思う。ちやうどいま、運河をまたぐ県道三号線の橋の下で、雨宿りをしながらこのノートを書き進めているところだ。」《安全装置をとりあえず》）。この読みの経過において、「記録」が「ノート」であると確定し、その記述者を《ほく》とする読者の統一した観点が形成されるのである。だがその後、他の記述者の登場することに、記述者としての《ほく》の統一性は揺らぎ、注記や書き込みによって「ノート」の「字体」やペンの色の変更を書物の印刷文字から推測しなくてはならない読者は、最後の章でついに「ノート」設定という虚構内の「安全装置」が完全に解除されて、冒頭の《ほくの場合》に、つまり「記録」と《ほく》という文字が対応する何かが不確定の

ままであり、「今のところ、箱男は〈ぼく〉自身」が「この記録」を「書きはじめている」場面に連れ戻されるのである。

『箱男』における部分性は、物語と虚構または「ノート」と書物のあいだの間接性に留まらず、最終章の虚構移動によって「ノート」が世界へと変容する際に、物語の世界を自ら属する実世界に投射し続けていた読者の読む習慣そのものに問いを向ける。言いかえれば、作品の外延を書物のそれ同じと捉え、実世界と物語世界を対応的に構成する習慣に対して、『箱男』は「〈ぼく〉」なる一人称代名詞の一回性によってその同一性に切れ目を入れ、読者と物語世界を関連させていた「ノート」から、虚構移動によって物語世界と実世界との関係自体に問いを向けるといえる。実世界の物質を素材とするノートのように、言語を素材とする虚構の「ノート」の外延を知ることとはできないのだ。

こうして、「ノート」という二つ目の「安全装置」を外すなら、物語、虚構、世界に関するこの間接性は、拙論「序」において一対一対応させる習慣に対し、作品を構造として仮設した際に取り出した「照応」の関係すらも廃棄する移動性の力を潜在していることが理解されるのである。

三 最小の領土としての箱 ——放浪性に関わる第三の問い——

今一度「ノート」という設定に留まると仮定しよう。その場合、

《Bの場合》とでも呼べそうな「箱男 予告編—周辺飛行13」を「ノート」の一部とみなし、『箱男』のどこに挿入されるべきかという問いを立てることが可能だろう。すると、「かつての住人」としての「B」への言及や「ブラック・ジャック」の話題に触れる点からも、挿入箇所は両者が含まれる中盤の《書いてあるぼくと、書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》の章の近辺ではないか、という推測が成り立つ。だが一方で、この推測は、『箱男』が「ノート」の或るヴァージョンであり、この部分を含めた別ヴァージョンの存在も想定可能であると述べるに等しい、ということもあらわにする。

このようなヴァージョンを、原—『箱男』を想定してオリジナルの「ノート」を復元するという観点から説明するのは難しい。確かに、書物と「ノート」を一致したものとみなし、『箱男』という作品に両者を帰属させる場合、「箱男 予告編」は出版以前の「予告」として実世界の時系列に配置され、件の仮定は『箱男』という作品を弄ぶ愚かな行為と一蹴することも可能だ。が、「ノート」と書物が一致せず、そのズレを『箱男』が示唆している場合は、この超越的な観点に依拠することは難題を増やすだけだろう。言葉でできた「ノート」の外延は拡大可能だが、その境界に位置する「記録」も消失せずに、むしろ異なるヴァージョンを生み出しつつ移動し続けるだろうからだ。

この移動性は、「箱男 予告編 そのII—周辺飛行14」における書き換えという行為における「記録」と「ノート」の境界確定につ

いて検討する際に、オリジナルという考えをはねつける力となる。このテキストは『箱男』前半の《箱の製法》の章の内容にほぼ重なる記述であり、両者ともに「記録」の領分に属している。『箱男』の場合、《ぼくの場合》で「これは箱男についての記録である」という記述の後にこの章があり、書物のページ番号に従うなら、この章も「記録」という前提の下にあると捉えうる。その一方で、「予告編 そのⅡ」の場合、《箱の製法》のタイトルの前に以下のような但し書きが冒頭に置かれている点に注意する必要がある。

この箱男についての記録を読むにあたって、もしあなたに多少でも時間的余裕があれば、ぜひともお願いしたいことがある。箱男と同じ箱をつくって、ほんの二、三分でいいから、かぶってみてほしいのだ。もちろん、箱をかぶったままで読みとおしてもらうのがいちばん望ましい。絶対に副作用がないとは、断言できないが、食塩だつて量を超えれば毒になりうるのだ。用心するばかりが能ではあるまい。

箱の製法は次のとおりである。

〔「箱男 予告編 そのⅡ—周辺飛行14」〕

この記述の後に『箱男』の《箱の製法》の章とはほぼ同内容の記述が同じ章題の後に続くのだが、両者ともにこの「記録」が書かれている素材に関する情報はない。「箱男 予告編—周辺飛行13」の後に掲載されたという観点を採用すれば、「ノート」である可能性は高いが、『箱男』出版後にこのテキストを小説に組み込んだ《箱の製法》の前段階の下書きや素描のように解する場合、『箱男』に従っ

て、小説世界ではまだ「ノート」なる枠組みが語られていないという見解もありうるだろう。しかしここでは、両者の調停に踏み出すよりも、両者に共通の前提を問おうと思う。なぜなら、両者は実世界の時間に沿って各テキストを並べ、書物のページ番号に従って読むという直線的時間を前提とすることでかえって事態を紛糾させてしまうからである。

「箱男 予告編そのⅡ—周辺飛行14」を、『箱男』に収められた《箱の製法》という章の一種の下書き的地位に固定する場合、両者を作者が主体の同一性を維持しつつ実世界の時間系列に従って修正を加え、作品化したとする実世界の観点の導入が可能となる。一方、作品が作者を指示するような対応関係が可能なのは、作者が書くという一人称的行為を超え、「彼」として三人称化しうる超越的観点がさらに要請されるからだろう。だが、バンヴェニストを参照しつつその前景化を試みた『箱男』の言葉の間接性を思い起こすなら、「私」として作者が書く行為は、作者が「彼」として客観視されることと区別されねばならない。『箱男』を読むことが果てしない間接話法の最中に巻き込まれることだとするなら、読者もまた「彼」と呼ぶような客観視しうる観点を奪われているはずである。この場合、読者は、作家もまた「今のところ」という「一回」性と「離散」性を各断片に行使する「私」という一人称として各ヴァージョンを書き、書くこともまた各々の「私」として複数化する行為となる、というパースペクティヴを拒否する理由はない。

このようなパースペクティヴ性は、『箱の製法』というタイトル

を含む二つの断片を並列させ、双方が互いのヴァージョンとして扱われることを可能にするだろう。『箱男』の最初に記された「記録」という語をその後の「ノート」という語に対応させ、写真とキャプションの不明瞭な対応や新聞記事に似せたレイアウトが挟まれた書物のページを「ノート」として読むことは、書物と「ノート」、そして「ノート」と「記録」の境界を際立たせる移動性に身を委ねるのと同義だった。それゆえ『箱男』と題された書物からはみ出すものがあるかぎり、読者が作者を「彼」に縮減して自らを外側に留まらせることは難しい。虚構内の「ノート」の諸断片を書物のページから確認できず、「ノート」に記された多くの「へぼく」が同一人物かどうか確証もないのと同様、作者もまた書物に印刷された文字として読者の前に提示されているからである（初版のヴァージョンなら、書物に挟まれた折込付録「へ書斎にたずねて」をインタビューされた間接的な記録としてどのページにも挿入可能であり、文庫ヴァージョンのようにページに印刷された文字でしかないこともありうるだろう¹⁰⁾）。『箱男』を読む行為は、想像力によって自らの身の丈を超えて物語的虚構世界を拡大することに向かわず、目前のページに直面しつつ自らの身の丈に留まるのである。

それゆえ、「箱男と同じ箱をつくって、ほんの二、三分でいいから、かぶってみてほしいのだ。」（「箱男 予告編そのⅡ―周辺飛行14」）という要請は、読者を二人称として一人称の「へぼく」と「相関関係」を結ばせるだけでなく、その身の丈の「現存 (instances)」(パンヴェニスト) という最小限の領土に留まるように促し、そこ

に三人称の「客観」性を持ち込む余地を排除するように見える。この「相関」関係は、『箱男』にも維持され、その最後の場面で大きな効果を発揮するだろう。

ここもけっきょくは閉ざされた空間の一部であることに変わりはなさそうだ。それにしても、彼女は何処に消えたのだろうか。こわごわ下をのぞいてみたが、暗くて何も見えなかった。さらに一歩踏み出してみたら、どうなるのかな。好奇心はある。しかし似たようなものだろう。いずれ同じ建物の中での出来事にすぎないのだ。

そうだ、忘れないうちに、大事な補足をもう一つだけ。箱を加工するうえで、一番重要なことは、とにかく落書きのための余白をじゅうぶんに確保しておくことである。

《……………》

読者は、「ノート」から箱の中の「落書きのための余白」について「大事な補足」を書き加える記述者が、一行空いた空白より以前の記述者と同じ人物なのかもわからぬまま「安全装置」が外され、ダンボール箱の内側にこれらの言葉が書かれていたのを知る由もなく、急速な移動によって物語世界に巻き込まれる。だが、この浮遊する「記録」によって、自らの実世界を物語、虚構、世界に投射し続けてきた自らの習慣が問われる事態に困惑する読者は、呼びかけられる二人称に安住することをやめて、一人称のこの「私」となり、その最小限の「現存」という領土に生きる自分を見出すので

はないか。なぜなら、この一人称の行為空間こそ、虚構、物語、世界を対応させ、実際世界に自らを固定して書物の外側から読むという習慣を変え、三者の間の移動性の中を放浪する「自由」な「展開可能性」へ踏み出すために必要な特異性の領土だからである。

もし『箱男』を読むことが、この特異性の領土を獲得する過程を含むなら、その最小化の例示が物語世界における箱の中の空間に類似しているとしても不自然ではないだろう。その場合、箱男たちが放浪する物語世界における「地方都市」は、彼らの一回的なパスペクティブによって書かれた「ノート」の浮遊する「記録」であったように、都市から脱領土化した「都市的なもの」であるはずだ。この意味で「都市的なもの」は、読者の住む世界に実在する都市から導出される観念と区別されねばならないのである。

この最小の領土において「都市的なもの」を検討するなら、それは移動性自体であり、この性質が、間接性、部分性、放浪性を三つの間として読者の習慣に突きつけるといえる。言いかえれば、「都市的なもの」自身は最小の領土すら持たない運動そのものだろうが、読者の実際世界の都市が物語世界に投射可能な場合、「都市的なもの」は物語世界における箱男たちの部屋の中から路地への移動と表現され、投射の困難さを含む虚構設定では、「ノート」から「落書き」や「余白」への移動を遂行し、物語的な虚構世界に想像の翼を広げようとしながら、書物のページに並ぶ印刷文字を単に見ている読者自身の最小の領土へ回帰することを促しているのである。

しかし、他の版に「都市的なもの」や「帰属」をめぐる議論を展開する折込付録「書齋にたずねて」がない以上、ここまでの読みはこの付録が差し挟まれた『箱男』初版に限定されたままであることは確かである。本論でヴァージョン概念を制限的に用いたのはこのためだ。この概念のさらなる検討には、認識と解釈の間に存在する先行性の問題があるからである。すなわち、バンヴェニストが言語の活動において見出した〈見た人が見ていない人に伝えること〉が、〈見ていない人が別の見ていない人に伝えること〉になぜ先行するのか、という問題である。「都市的なもの」から見れば、「ノート」であれ、書物であれ、実際世界の物質的対象を投射することは、前者の先行性に従属したままだからである。⁽¹⁾このような言語の本質における政治性の検討から、「都市的なもの」を含めた脱領土性のさらなる捉え直しを行う必要があるだろう。

(注)

- (1) 拙論「書物の「帰属」を変える——安部公房『箱男』の構成における「ノート」の役割——」(『工学院大学研究論叢』50・1 二〇二二・十一所収)
- (2) 拙論「書物の「帰属」を変える(Ⅲ)——安部公房『箱男』と虚構の移動性——」(『工学院大学研究論叢』52・1 二〇二四・十一所収)
- (3) 拙論「書物の「帰属」を変える(序)——安部公房『箱男』における物語・虚構・世界——」(『繙』二七号 二〇二五・二)
- (4) この点において、佐藤信夫の構造として捉えた諷諭を参照し(『第6章 諷諭』『レトリック認識』一九九二・九 講談社学術文庫 所収)、その生成の面については佐々木「諷諭」企画構成・佐藤信夫、監修・佐々

木健一、執筆・佐藤信夫、佐々木健一、松尾大『レトリック事典』二〇〇六・十一 大修館書店で捕捉したが、いまだ作品の領域に留まると思われた。

(5)

バンヴェニスト「16 代名詞の性質」(『一般言語学の諸問題』河村正夫、木下光一、高塚洋太郎、花輪光、矢島猷三共訳 一九八三・四 みすず書房 所収)。またオズワルド・デュクロは「一人称および二人称の代名詞は、話している人と話しかけられている人とをそれぞれ指示する」とし、その一方のみを「指呼詞」(deictique)として区別したバンヴェニストの見解を紹介して「指呼詞の意味そのもの(その指向対象を見出すため用いるべき方法)が、言語に属するにもかかわらず現実の使用との関係においてしか規定されぬ以上、指呼詞は言語の内部への言述の侵入であることを示した」と要約している(O・デュクロ/T・トドロフ、『言語理論小事典』滝田文彦 他訳、一九七五・五 朝日出版社)。

(6)

安部は登場人物を三人称の「一見客観的な小説は書きたくなかった」理由を「作者が無傷」でいる立場を問題視した後で、「そこで『箱男』の場合は一人称で書いたんだが、こんどの『密会』では、小説の構造が、三人称でない」と、とらえられない。一人称では登場人物を他者として存在させることがむずかしい」と述べる(安部公房「書き下ろし小説『密会』を執筆中」『東京新聞』一九七七・一・三一 談話記事)。

(7)

言語を言語活動において捉えようとしたバンヴェニストの言語観を、ドゥルーズ／ガタリは蜜蜂の情報伝達を言語ではないと規定したバンヴェニストの見解から、見た人が見えない人に伝えることと見えない人が別の見えない人に伝えることの両者は間接的であり、両者が成り立つ言語は集団的行為の次元が必要であると指摘している(4 一九二三年十一月二〇日 言語学の公準「ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー』上巻 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳 二〇一〇・九・一〇 河出文庫 所収)。

(8)

「ノート」に表われながらも、その領土を離脱する移動性それ自体は領土を持たない設定を必要とするゆえに、固定した観点からのヴァージョン概念もヴァージョン化する必要がある。例えば安部公房が様々なメディアに自らの作品をヴァージョン化したという考えを用いる場合、ヴァージョンは歴史の時間を前提とし、その線上に位置する名の単一性を定點とし、一つの作品または作品内容を固定化した上で「ワンソース・マルチユース」として分岐的に表現されるが(木村博子「ヘリテラリー・アダプテーション」としての思想」『安部公房とはだれか』二〇一三・

五 笠間書院 所収)、これも移動性が衰弱したヴァージョンと捉えるような多元論的な「展開可能性」を考えなくてはならない。

(9)

工藤智哉の「予告」の扱いは、書物と「ノート」を区別していないが、「ノート」を物質として扱う際に、実際世界のノート形態では困難なトポロジカルな次元でのヴァージョンを考える場合に生じる実際世界の投射を再認識させる点では示唆的である(『箱男』試論―書物の書き手をめぐって『国文学研究』第一三七集 二〇〇二・六)。

(10)

書物の物質面を維持する場合も、『箱男』には折込付録の有無、挿入された写真の場所、最初のページのネガフィルムの異同等、ヴァージョンを考えざるを得ない場面が多くある。

(11)

物語・虚構 世界を一つの対応関係で結ぶ大枠は、そもそも認識が先行し、解釈が遅れて生じるという認識の先行性から生じており、解釈の認識に対する二次性も、この先行性を行使する言葉と意味の一对一対応関係を維持する社会的関係によって価値づけされている。一方、『箱男』が「ノート」によって言語の間接性を示唆し、「贗」という言葉に物語世界と虚構としての「ノート」を移動する権限を与える点からも、認識と解釈の先行性の問題はむしろ逆転するように思われる。

(ながの ひろし 本学非常勤講師)

